

あまんきみこの世界

— 『車のいろは空のいろ』を中心に—

川北 典子

1. はじめに

あまんきみこは、現代日本で最も活躍している児童文学作家のひとりである。日本では数少ないファンタジーの書き手であるともいわれている。いずれにしても、彼女が、最初の作品集『車のいろは空のいろ』（ポプラ社、1968）出版以来、創作児童文学の分野で、独自の世界を拓いてきたことは確かであろう。

特に近年、それらの作品は、「癒しの文学」とも称されるようになった。病気や飢餓のような具体的なものを始め、悩み・苦しみといったものを治す作用を「癒す」という。現代人特有の「こころの病」を、今、文学や音楽、絵画などが「癒す」ことのできる可能性が指摘されたりもする。かつては、「優しさ」が、児童文学のキーワードのひとつであった。「優しさ」は、円滑な人間関係を結ぶためになくってはならない要素であり、子どもたちは、児童文学をとおして、現代社会をうまく生きぬいていくための術を身につけることができるのだと考えられた。

『車のいろは空のいろ』が、最初に世に送り出されたのは1968年、第二次世界大戦を経て、人々の暮らしがようやく平穏に営まれるようになった時期であった。しかしながら一方で、急速な経済成長の歪みともなって、公害問題や少年非行の問題、そして、子捨て・子殺しの問題など、種々の社会問題発生の兆しも見えている。まさに、明と暗が混在した、脆くて危うい社会であったといえる。児童文学においては、松谷みよ子、佐藤さとる、いぬいとみこ、山中恒らが、次々と作品を発表し、出版業界の活況とも相俟って、「児童文学花ざかり」といわれる状況を呈していた。そこへ、あまんきみこは、透きとおったさわやかな新風を送りこんだのである。

本稿では『車のいろは空のいろ』を中心に、児童文学作家としてのあまんきみこが持つ独自性について探っていくとともに、国語教科書にしばしば採りあげられる彼女の作品をとおして、教育現場における児童文学をめぐる問題について考察していきたい。

2. 作家とその周辺

あまんきみこは、1931年旧満州撫順市に生まれた。本名、阿萬紀美子。その後、新京、大連等に転居し、敗戦後に帰国している。大阪府豊中市で高校時代を過ごした後、日本女子大学児童学科の通信教育部に入学、与田準一に師事し、その紹介により卒業後童話雑誌「びわの実学校」(坪田譲治主宰)に最初の作品「くましんし」を発表した。1968年、同誌に掲載した作品をまとめて『車のいろは空のいろ』を刊行、第1回日本児童文学者協会新人賞、第6回野間児童文芸賞を受賞している。

祖父母、父母、父の妹2人という大家族のなかに、あまんきみこは、ひとりっ子として生まれ育った。そのような環境は、彼女の創作活動に少なからず影響を与えていると思われる。「私は体が弱くて、横になっていることが多かったんですね。熱にうかされてぼーっとなっている私は、窓の向こうに見える空だけが楽しみでした⁴⁾」と、彼女自身が語っているように、多くの深い愛情に包まれながらも、おとなのなかにひとり子どもとして存在する孤独感は、空想の世界へと彼女を誘った。刻々と変化する空の色や雲の表情は、「空の絵本」として、彼女の心の奥底に忘れ難い情景を残したのである。

また、幼い頃、毎夜眠りにつく前には、家族が交代でさまざまな話を聞かせてくれたという²⁾。祖父は偉人伝、祖母は民話、母は教訓を含んだ生活童話、上の叔母はグリムやアンデルセン、下の叔母はお化けと幽霊の話など、それぞれに得意なレパートリーがあり、順繰りに数多くの話を楽しみながら育った。それらの体験が、彼女の豊かな感受性に反映されていることは自明である。

親から子へ、祖父母から孫へ、いわゆる「おはなし」を伝え聞くことの重要性が、近年しばしば指摘されている。かつて炉端で語られてきたような昔話も、生活様式や家族形態の変容とともに、語りの文化ではなく活字の文化として、子どもたちの前に存在するようになっていく。だが、子どもにとって、耳から入ってくる言葉の体験は、彼らが人間関係を結んでいくための基礎となる重要なものである。また、「聞く」こと、人の言葉に耳を澄ませることは、自らの表現力を養うことでもある。自分自身の想いを、豊かな言語で表現できることは、人と適切なコミュニケーションをとるための第一歩でもあろう。また、何より、幼い子どもが、信頼できるおとなの胸のなかで、膝の上で、寄り添って過ごすひとときは、そこに行き交う言葉の数々とともに、子どものなかで、大きな財産として残っていくものである。そういう意味では、おとな自身が語りの技術や習慣を持たなくなってきた現在の、幼い頃に出会う文学や絵本が、視覚・聴覚的刺激として、子どもの内面に刻み込まれることは意義深いことであると思われる。

あまんきみこは、前述のような自らの家族による幼い頃の「おはなし」の体験を大切に、詩や文章を、声に出して読むことの心地よさを指摘している。彼女は、自分自身の子どもを育てる過程においても、そのような母から子への「おはなし」を実践した。核家族のなかで、語り手は母である彼女しかいなかったため、いろいろな物語のパターンを用意して子どもたちに聞かせるよう心がけたという。また、金子みすゞ童謡詩集『あした』(矢崎節夫編、教育出版株式会社、1995)の前書きでは、みすゞの「つゆ」という詩に触れ、「目でこの『つゆ』をよんだ人は、自分にだけ聞こえる声を出して、もう一度、ゆっくり読んでみてください」と述べている。そうすることによって、「やさしいあたたかい世界が体のおくにしみる」のだという言葉のなかには、みすゞの詩が持つ魅力のみならず、あまんきみこ自身の「語りことば」による体験に裏付けられた想いが含まれているように思う。

また、彼女の数多い作品のなかで、戦争をモチーフにした物語は比較的少ない。しかし、幼い頃の戦争体験が、その後の考え方や生き方に深い影を落としていることは確かである。講演会などの折に、戦争について語ることも多く、彼女の内面に秘められたおそらく最大のテーマであろう。なぜ、「引き揚げのことを書かないか」と問われ、「引き揚げてくるたいへんさを書くためには、『傀儡国家』(満州)のことをきちんと書いていなければいけない」と、彼女は答えている。それほど、彼女の心の奥底に秘められた戦争への、そして平和への想いは大きく深い。したがって、あまんきみこの戦争をテーマにした新たな作品を手にすることができるのは、もう少し時を待たねばならないかもしれない。なお、『車のいろは空のいろ』のなかの戦争をモチーフにした作品における表現方法およびその独自性については、後に別項で述べる。

3. 『車のいろは空のいろ』考

数多い作品のなかでも、とりわけ最初の単行本である『車のいろは空のいろ』は、あまんきみこの児童文学作家としての独自性を明確に表わしている作品であるといえる。作品のモチーフ、表現の方法など、いずれをとってみても彼女の原点とあって過言ではない。ここでは、代表作ともいえるこの作品を、より詳細に検討してみることによって、児童文学作家あまんきみこの魅力を探る。

① 内容と構成

『車のいろは空のいろ』は、空色のタクシーの運転手である“松井五郎さん”を主人公として描か

れた8編の物語からなる。その殆どが、「びわの実学校」を経て出てきたものであるからだろうか、どの物語からも、緻密に、丁寧に創りあげてきたという作者の想いが伝わってくる。

「小さなお客さん」「白いぼうし」「山ねこ、おことわり」「くましんし」「ほん日は雪天なり」は、いずれも、子ぎつね、モンシロチョウ、山ねこ、くま、きつねが客になり、松井さんに、そして読者に、もうひとつの不思議な世界を垣間見させてくれる。また、「うんのいい話」は、釣り客の魚の命を奪おうとする行為が、「すずかけ通り三丁目」は、戦争によって心に傷を負った母親の情念が、「もうひとつの世界」へと松井さんを誘った。

振り返ってみると、松井さんのタクシーに乗る動物たちは“共に生きているもの”かもしれません。小さい頃、ちょうちょはちょうちょに生まれたかったのかなあ、犬は犬に生まれたかったのかなあって、不安だったんです。“存在の不安”というのでしょうか…⁽³⁾

作者は、そのような“存在の不安”を根幹において、すべてのものをその存在から受けとめるということで、不安の解消を図った。それは、いわゆる「共生の思想」に繋がるものでもあろう。人間以外のさまざまな事物との交流、そして、日常生活の場から「もうひとつの世界」への出入り口、それらひとつひとつがまったく違和感なく語られているのが、あまんきみこの世界なのである。

ファンタジーは、多くの場合、実際には起こりえない空想の世界の物語であると定義される。しかし、だからといって、あまんきみこを現代日本児童文学における「ファンタジー作家の旗手」と位置づけることは早計であろう。なぜなら、あまんきみこが描く「もうひとつの世界」は、現実の日常世界と対極にあるような空想世界ではないと考えられるからである。

「2Bの鉛筆を握った手が動きだすのは、書きたいことが、『ありえないこと』ではなく、『ほんとうのこと』だと信じられた時からです⁽⁴⁾」と作者自身が述べているように、彼女にとって、人間以外の生き物たちと経験を共有することは、決して日常の生活から抜け出して、特別な体験をすることではない。作品を書くという行為のなかで、どんなことがあっても彼女が掴んで離さないもの、それは、「ほんとう」であるという意識であろう。彼女の目に見え、耳に聞こえ、その存在が感じられた時、はじめてあまんきみこの世界は生まれる。

そして、それを可能にしているのは、あまんきみこという作家の、ものを見る目の注意深さと確かさであると思う。あるいは、「作家」などという職業如何にかかわらず、人間としての、と言い換えた方が適切かもしれない。ものごとを表面だけしか見られない人間には踏み込むことのできない世界を、彼女はいともしやすく行き来してみせる。人と人とのかわりのなかで、常に相手の立場にたつてものを見、思う。多くの人が頭の中で理解してはいても、ほんとうには持ち合わせることのできない感受性が、彼女のなかには備わっているのであろう。だが、それは、当然のことながら、天性の資質によるもののみではない。彼女がこれまで歩んできた道々で培われてきたものでもあろうし、努力によって得られたものでもあるだろう。あまんきみこは、努力していることを決して見せないで、人一倍努力している作家だといえる。

② 表現

『車のいろは空のいろ』を手にとって目次の頁を開いたとき、決まってひととき強いインパクトを感じる物語がある。それは「すずかけ通り三丁目」、この作品集のなかでは、唯一戦争をモチーフにした物語である。

前述のように、あまんきみこは、旧満州で生まれ、子ども時代に戦争を経験している。ふんわりとやわらかな雰囲気醸し出される彼女の多くの作品に、戦争の持つイメージは、とても似つかわしく

ないようにも感じられよう。しかし、講演会等において、彼女の口にのぼる言葉の端々から、そして何より、この「すずかけ通り三丁目」や絵本「ちいちゃんのかげおくり」のメッセージ性の強さから、これらの作品に込められた反戦の想いが、彼女の作家生活にとって、非常に重要な意味を持っていることが理解できる。

あまんきみこの描く戦争は、酷く悲惨な場面をストレートに描いたものではない。

昭和二十年の春から、“空襲”がはじまりました。七月の“大空襲”のとき、三十機のB29が、町の空をとびまわり、しょうい弾をつぎつぎにおとしました。あちらもこちら火事になり、町は、もう火の海でした⁵⁾。

登場人物の台詞のなかで、事実のみが淡々と語られている。おそらく、幼い子どもにとって、これらの描写だけで、戦争がもたらす悲惨な状況を把握するのは難しいだろう。「しんでいたのです」という言葉の重みを、現代の子どもたちがどのように理解するかは興味深いところである。

どろどろとした悲惨さを表わすのではなく、現象のみが淡々と語られる手法は、その残酷性がしばしば問題にされる昔話の語り口に似ている。だが、昔話は、おどろおどろしさが語られないところに、つくり話の要素を見出すことができるのであるが、あまんきみこの作品においては、逆に、必要最小限の簡潔な表現が、読者に現実を突きつける。すなわち、細部では、あちらこちらから突き出しているナイフの刃先を、やわらかなペールで覆いながら、作品全体をとおして、強いメッセージを発信しているのである。

子どもが幼ければ幼いほど、戦争などという未知の情報に対して無防備であり、誤った出会い方をすれば、それは、恐怖として心に棲みこみ、拒否反応を起こさせる要因となる。そして、一旦そうなってしまえば、大きくなっても、なぜ戦争が起ってしまうのか、それを廃絶するにはどのようにすればいいかなどの根本的な問題については、考えることすらできなくなってしまう。

そのような意味で、あまんきみこの戦争をモチーフにして描かれた作品は、幼い子どもの心を傷つけることなく、自然なかたちで、戦争というものの持つ不条理を伝えているといえる。それが、彼女の備え持つ独自の表現力であり、ものごとを表面しか見ることのできない読者に対して、真実を無理なく丁寧に説いてくれる確かな筆力の所以であろう。

また、あまんきみこの豊かな表現力の源は、リズム感にあると思われる。彼女の作品に挿入される詩や歌、そして、いわゆる「はやし言葉」の面白さには定評があるが、文章全体にひとつのリズムが流れているのを感じるものがしばしばある。それは、彼女の生活のリズム、思想のリズムといえるかもしれない。

現実在即して考えてみると、松井五郎さんは、心やさしい運転手である。「くましんし」の心の痛みを、自分のことのように感じて、しみりとグラスを傾けることのできる、また、せっかくももらった「山ねこおことわり」の紙を破ってみせて、異種の相手を受け入れることのできる人間である。だからこそ、心やさしい生き物たちが彼のもとに集うのであろう。そして、心やさしく生きていくことに四苦八苦している読者は、優れた作家の表現力を借りて、そんな素敵な「もうひとつの世界」を体験させてもらっているのだといえる。

4. 教科書と児童文学—国語教材としての「白いぼうし」

前章の『車のいろは空のいろ』のなかでも、「白いぼうし」は、小学校の国語の教科書に掲載されている作品でもあり、子どもたちにとって馴染みの深い物語であると思われる。非常勤講師をしている短期大学で、「児童文化」という科目を担当しているが、そのなかで児童文学をとりあげるとき、

「くまの子ウーフ」(神沢利子)、「一つの花」(今西佑行)、「ごんぎつね」(新美南吉)などの作品とともに、あまんきみこの「ちいちゃんのかげおくり」や「白いぼうし」には、学生の反応が顕著に見られる。いずれも、小学校の国語の教科書に掲載されていた作品である。とりわけ、「白いぼうし」の場合は、「ああ、松井さん!」と、いかにも旧知の人物に出会ったかのような声がしばしばあがる。

国語科の授業のなかで、この作品(教材)に使われる時間は、概ね6~10時間前後であると思われるが、その間に学生(子ども)たちは、どのようにして「松井さん」と友人になる術を身につけていったのであろうか。本章では、授業のなかで「白いぼうし」の世界を読者が享受していく過程を、いわゆる「文学教材」読解にかかわる問題とともに考察したい。

① 「文学教材」と「指導方法」

「文学教材」をどのように取り扱うかについては、国語教育の現場においても、長年論議されてきた。なかでも、しばしば取り沙汰されるのは、「気持ち指導」の問題である。学習指導要領にも、戦後まもなくの頃より、実に半世紀にわたって、「人物の気持ちの変化を想像しながら読む」「人物の気持ちや場面の情景の叙述や描写を味わいながら読む」といった項目が並べられていた。近年、それがようやく変わりつつある。

1998年7月には、教育課程審議会の答申において、「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」のあり方を見直すことの必要性が提唱された。そしてその結果、新学習指導要領では、読解の時間数の減少、学年による指導事項の重点化、「伝え合う力」の育成などが明確にされたのである。したがって、文学作品だからといって、必ずしも精読が必要であるとは考えられなくなり、ともすれば教師の「読み」や感動の押しつけになりがちであったといっても過言ではないような心情理解中心の授業形態は改められつつある。さらに、「文学教材」においても論理性を重視すること、また、児童の「自ら学ぶ力」を育てることに重点をおくことなど新たな方向性が提示された。

② 「白いぼうし」読解

「白いぼうし」は、4年生の教材であるが、主人公松井五郎さんの「優しさ」、そして現実と非現実が交錯する不思議な世界が中心モチーフであるとされている。作品は、次のような四場面から構成されている。

1. タクシー運転手松井さんと乗客「しんし」の、夏みかんについての会話。
2. 松井さんが、誤って逃がしてしまったチョウの代わりに、男の子のぼうしの下に夏みかんを入れる。
3. 知らない間に車に乗っていた女の子にせかされて、男の子の様子を気にしつつ、松井さんは車を発進させる。
4. いつのまにか女の子は消え、車外に出た松井さんは、「よかったね」「よかったよ」という小さな声を聞く。

車の動きとともに、情景が変わっていくので、物語の場面分けとしてはわかりやすい。「これは、レモンのにおいですか?」という冒頭も、「レモン」特有のさわやかな色彩、そして酸っぱい香りといった視覚・嗅覚に訴える象徴的な一文である。

また、第一の場面は、夏みかんというこの物語のキーワードのひとつが登場することに加えて、主人公である松井さんがどのような人物であるかを、読者が見極めることのできる要素をたくさん含んでいる。

- ・しんごうが赤なので、ブレーキをかけてから、うんてんしゅの松井さんは、にこにこしてこたえました。
- ・もぎたてなのです。きのう、いなかのおふくろが“速達”でおくってくれました。においまでわたしにとどけたかったのでしょうか。
- ・あまりうれしかったので、いちばん大きいのを、この車にのせてきたのですよ。

いずれの文からも、松井さんの実直でおだやかな性格を感じ取ることができる。また、物語の進行に直接かかわることではないが、松井さんと「いなかの」母親との良好な関係についても表わされている。

第二の場面では、松井さんは、「誤って」チョウを逃がしてしまう。松井さんが、チョウを逃がしたことを、「助けた」と捉え、それを松井さんの「優しさ」と定義している指導案も見られるが、それは文脈を正しく掴んではない。なぜなら、松井さんがチョウを逃がしてしまったのは、偶然のできごとといってもよいからである。もし、最初から、チョウを男の子が捕らえたものだと松井さんが承知していたなら、男の子に断りもなくチョウを逃がすようなことはしなかったであろう。この場面では、松井さんの関心は、あくまで「ぼうしの主」にある。それは、予想だにできなかったチョウの存在に対する「優しさ」ではなく、子ども用のぼうしが、飛んでいったり汚れてしまったりすることに対する「親切」なのである。

第三場面は、非現実への導入場面となっている。知らない間に車に乗っていた女の子の存在は、そして言動は、作者が得意とする「不思議世界」のできごとである。「女の子は何者なのか」「どこからきたのか」……読者の心にわき起こる疑問は、しかし、物語の次の展開への期待の大きさに内包されてしまう。

- ・車にもどると、おかつぱのかわいい女の子が、ちょこんとうしろのシートにすわっています。
「道にまよったの。いってもいっても、四かくいたてものばかりだもん。」
つかれたような声でした。
「ええと、どちらまで？」
「え？……ええ、あの、あのね、なの花よこ町ってあるかしら？」
「なの花橋のことですね」
- ・客席の女の子が、うしろからのりだして、せかせかといいました。
「はやく、おじちゃん。はやく行ってちょうだい。」

松井さんと女の子（チョウ）が、実際に接しているのは、以上のようなわずかな数行であり、女の子像について推測できるのも、この部分だけである。「おかつぱ」「かわいい」「ちょこんと」「道にまよった」「……だもん」など、いかにも幼く頼りなさそうな女の子のすがたとして表わされている。そして、その小さくて愛らしい様子は、「なの花」から連想されるモンシロチョウの乱舞という情景とともに、読者の頭のなかでチョウと重ね合わせられる恰好の材料となる。

さらに、幼い女の子が、突如として身を「のりだして」、「せかせかと」、殆ど命令ともとれる懇願をするという場面の急展開に、読者は、再び女の子の素性に思いを馳せることになる。ただし、客の希望に忠実な運転手である松井さんは、女の子の変貌ぶりについては、さほど関心を示していない。いずれにしても、このあたりは、物語のクライマックスであり、第四場面すなわち完結場面へと向かう重要な箇所である。

そして、最後には、チョウの白、クローバーの緑、たんぼぼの黄、そして文章表現はされていないがおそらく空の青、といった豊かな色彩と、「よかったね」「よかったよ」というやさしいリズムに満ちた言葉の繰り返し、読者に穏やかな満足感をもたらしている。ここでは、松井さんとチョウの直接的なかわり合いはもうみられないが、読者の想像のなかで、チョウの声を聴く松井さんの女の子に対する思い、そして、チョウ（女の子）の松井さんへの気持ちが推し測られる部分である。

以上のような「白いぼうし」の構成や展開の方法は、子どもたちが物語を読みとるうえで、複雑な背景を持たず、比較的わかりやすい「不思議世界のおはなし」として、4年生の教材には適しているといえる。また、リズム感のある平易な文体は、音読しやすく、同じ作者の他の作品への興味や関心を誘発できる可能性が高い。

③ 松井さんの「優しさ」

松井さんは、心やさしいタクシー運転手であるという評価は、一連の物語を読んだ誰もが認めることである。前項でも挙げたように、松井さんの人となりを推察できる表現は、作品の随所にちりばめられているが、そのいずれもが、彼の親切で穏やかな性質を語っている。また、タクシー運転手としても、実直で勤勉な働きぶりは容易にうかがえる。

だが、国語教材としてこの作品を考えると、その「優しさ」に拘りすぎると、物語の本質を見誤るような気がする。例えば、この「白いぼうし」という作品は、報恩の物語ではない。にもかかわらず、松井さんの「優しさ」に対して、あたかも恩返しが行われているかのような読み方がなされたりする場合もある。

女の子（チョウ）の立場から物語の展開をみれば、冒険→危機（囚われ）→脱出→帰還という一連の流れが認められる。しかし、読者の視点は、常に松井さんを主人公として追い求め、彼の「優しさ」から引き起こされる、もしくは「優しさ」によって終結する事件を期待している。そして、『車のいろは空のいろ』のなかの物語の多くの結末にみられるように、松井さんが得るやすらぎや楽しさ、満足感が、読者を安心させるのである。それは、大方の読者の持つ「優しさ」崇拝であり、「優しい」松井さんにいくばくかの幸福が舞い込むという展開への願望でもあろう。

確かに、松井さんの「優しさ」は、『車のいろは空のいろ』全編をとおして流れているキーワードであり、それが主人公である松井さんの資質であるからこそ、異種異界のものたちとの交流も可能になるのであろう。だがしかし、前述したように、その部分だけを強調しすぎると、作品の評価自体が誤ったものになってしまうおそれがある。そのような危惧も含めて、児童文学における「優しさ」をめぐる問題については、今後さらに深く考察していく機会をもちたい。

5. おわりに

児童文学の目的は、子どもの心の栄養となることである。現代を生きる子どもたちが、「もうひとつの世界」のなかで、心豊かなひとときを過ごすことができる、そして、今抱えているさまざまな問題および課題解決の一助となりうる、そんな作品が求められる。さらに、将来出会うことになる数々の困難を克服していくために、生きて働く物語が必要となる。だが、現在の日本の児童文学作品のなかで、それらの条件を備えた作品は、ほんの一握りに過ぎない。子どもの読書離れが取り沙汰されているが、その背景には、彼らを取りまく種々の環境に関する問題が大きく介在していることはもちろん、子どもの読書意欲を満たすことのできる、またそれに値する作品自体が少ないことも事実として認められる。

あまんきみこの多くの作品は、絵本、児童文学いずれも、それらの条件を満たすことのできる質の高い物語である。児童文学作家であり研究者でもある中川正文は、人間存在の本質とは何かを描くこ

とが、児童文学の目的であると指摘している。あまんきみこの多くの作品には、それに適うものが確かに存在している。普遍的なテーマをとりあげ、それを、飾りすぎず、わかりやすい表現で、丁寧に描いているのが、あまんきみこの世界なのである。

また、子どもという読者に向けて、多くの想いやメッセージを発信しながらも、さまざまな受けとめ方を許容している。いずれの作品にも、「光と影」の思想⁶⁾にみられるように、ものごとを多面的に見ることの重要性、そして、自分以外の他者の立場に思いをめぐらす寛容性が内在しているが、必ずしもそれらの確実な読解を子どもたちに強要しているわけではない。それぞれの読み方、そのときどきの受けとめ方が、あまんきみこの作品の読者には赦されている。それは、ある意味では、いかにもつかみどころのない曖昧な世界のように思われるし、また何より教科書向きではないといえよう。だがしかし、彼女は諒解しているのかもしれない。読解の方法は多岐にわたっても、子どもたちが、最後には彼女の発信するメッセージを、多少なりとも心の奥にしまいこんでくれることを。そして、その背景には、児童文学作家としてのあまんきみこが、「子ども」を見つめるまなざしの深さや優しさ、確かさがある。

現代日本児童文学の分野で、あまんきみこは、すでに代表的な作家のひとりで見なされている。そして、今後も彼女は、そのような評価にふさわしい作品を送り出すことができるに違いない。作家として彼女が辿り着く先は、まだまだ未知のものであると思われるが、先にも述べたように、戦争という大きな重いテーマを、いかに作品のなかに具現化していくかが、彼女に課せられた課題のひとつであろう。戦後50年以上を経て、子どもたちはもちろん、作家のなかにも戦争体験のない世代が多くなってきている。体験がなければ語れないというわけでは決してないが、戦争という「人間存在の本質」にかかわるテーマに触れるには、やはり、それらを経験した、あるいは垣間見た人々のメッセージこそが、読者である子どもたちの心に届けられるべきだと思う。児童文学作家あまんきみこには、あえてそこに踏み入ってほしいと願うし、また、それが、彼女の新天地を開くものであるともいえよう。

【註】

(1) 「MOE」白泉社、2000.11、頁69

(2) 『車のいろは空のいろ』ポプラ社、1968、あとがき

そのほか、作家の履歴にかかわる記述およびエピソード等については、「児童文学講演会」(於：宇治市公民館、宇治児童文学サークル主催、2000.10.27)を始めとする各地での講演会や、懇談の折に聞き取ったものである。

(3) 前掲誌(1)

(4) 「日本児童文学」日本児童文学者協会編、1991.6、頁67

(5) 「すずかけ通り三丁目」

(6) 「光があるところには影があります。大人にも子どもにも、光のなかを歩いていて幸せなときには、影があることを覚えていてほしいと思います。そして、影を歩いている時には、光があることを信じてほしいのです。」前掲誌(1)

【参考文献】

「国語教育 4月号臨時増刊」(文学の授業—教え方の転換は可能か) 21世紀国語教育研究所編、明治図書、2001.4

「実践国語研究No208」(児童文化手法を生かした国語科の総合学習) 全国国語教育実践研究会編、明治図書、2000.5

「あまんきみこ『白いぼうし』論—読者論の観点から—」根岸泰子、岐阜大学カリキュラム開発センター研究報告14-3、1994.6

本稿は、児童文学創作同人誌「森」(「京都児童文学森の会」発行) 53号 (2001.4)、54号 (2001.7) に掲載したものを、大幅に加筆し再構成したものである。

A Children's Literature of Kimiko Amann

Noriko Kawakita

Kimiko Amann is one of a representative writer of the Children's literature in Japan today. Since she published her first work, 『Kuruma no Iro wa Sora no Iro』, in 1968, she has written an extensive body of literature.

This paper aims to show the strengths of Kimiko Amann's work as a writer of children's literature, particularly 『Kuruma no Iro wa Sora no Iro』. also the use of her literature in a Japanese textbook will be examined.

From now on, Kimiko Amann will be writing a lot of masterpieces, especially on the theme of "Peace and War".